大藏會

2513

114
A 4138

帝國圖書館藏

參議大隈朝臣延曆寺保存ノ奏議ニ付テノ考案并ニ附議

能監

昨明治十一年秋冬ノ交各地神社佛寺ノ景況ヲ曆觀スルヲ輦ニ東北諸國ニ隨ヒ各地神社佛寺ノ景況ヲ曆觀スルヲ得タリ然ルニ神官僧侶ノ紀綱ハ既ニ將ニ地ニ墜チントスルノ狀態ナルモ人民ノ神佛ヲ信スルノ念猶頗ル深キヲ究メ神社佛寺ノ廢頽スルヲ大ニ之ヲ憂慮スルコト却テ神官僧侶ニ超エタリ因テ案スルニ神社寺院ハ今日ニ於テハ決シテ之ヲ頽廢ニ付スベカラズ之ヲ頽廢ニ付スルハ方策ノ得タル者ニアラズ況ンヤ名勝巨字ハ國家觀光ノ一端外邦人ト雖モ甚タ愛惜シテ置カサルヲヤ是ヲ以テ其保存ノ方法ニ於テ焦慮苦思シ將ニ以テ上言請求スル所アラントス幸ニ靜岡驛

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

御注蹕ノ際閣下大命ヲ垂レ能監ニ社寺保存ノ方法ヲ徵ス時ニ歸京ノ後内務卿輔等ノ意見ヲ取リ以テ上言スル所アルヘキヲ期シタリ

車駕還城茲ニ數閲月其間能監主務ノ屬員等ニ就テ左諮右議遂ニ別紙甲号社寺直接間接二類保存方法ノ概略ヲ草シ將ニ奉上セントスルニ當リ

閣下又參議大隈朝臣延曆寺保存ノ上奏寫本ヲ能監ニ示シ而シテ其考證勘文ヲ上ツルヘキヲ命セラル能監之ヲ一讀シ竊ニ惟ラク明治ノ聖代茲ニ十二年而シテ内閣今又此持重懇篤ノ言ヲ建ツルノ參議アル實ニ國ノ一大進歩ヲ徵シ之ヲ文明史上ノ一變革ト稱スヘキナリト伏テ本案ノ主意ヲ察スルニ其要目三アリ曰ク法革會ニ勅使臨監ノ典ヲ復ス曰ク延曆寺保存ノ為メ全國勸進ヲ公許ス曰ク滋賀院ヘ他ノ門跡寺院ト共ニ永世ノ年給ヲ附與ス是ナリ是皆輕々議スヘキ者ニアラスト雖モ其内勅使臨監ノ事ト大勸進公許ノ事トハ既ニ能監カ將ニ上ラントスル甲号保存方法第一類第二類中ニ記スルモノナリ滋賀院年給ノ事ハ既ニ二十有餘年ニ適例アリ而シテ他ニ之ニ比擬シテ請求スル憂アルコトナキ者ナリ然ルニ今日弥之ヲ實施セラルヘキニ於テハ本案先ツ參議ノ建言アル三項ニ就テ將來并ニ既往ノ勘例ヲ考ヘ以テ内規ヲ定メ恩ニ狎ルヽノ弊ナク又續々請求スルニ堪エサルノ憂ナカラシメントス即チ三項ニ分テ其内規ヲ勘査シ考証ヲ付スル左ノ如シ

○勅使臨監アルヘキ大祭大會ノ際限

一　神宮祈年祭

一神宮祐嘗祭
一神宮新嘗祭
一孝明天皇祭
一神武天皇祭
一後桃園院天皇祭
一光格天皇祭
一仁孝天皇祭
一近陵四帝（後桃園院 光格 仁孝 孝明）皇后皇妃皇親式年祭
一官幣社例祭
一國幣社例祭
一官國幣社祈年祭
一官國幣社新嘗祭
右ハ既ニ例年或ハ式年ニ式部寮ニ於テ奉行ス

ル者ナリ而シテ猶其中ニ地方官ヲシテ代理セシムル者又ハ地方官ニテ祭事ヲ擔任スル者トノ別アリ右ニ記列シタル者ハ一々其由緣ヲ記スルヲ要セサルヲ以テ畧之

一准官幣社例祭

右ハ別紙保存方法第二類第三類御裁可ノ上ハ其箇所ハ追テ具狀ニ及フヘキニ付地方官ヲシテ奉幣セシメラレンコトヲ切望ス

一延曆寺法華會五年一度

右ハ元來六月四日（傳教大師ノ忌日）ニ六月會ト稱シ勅使登山アリシ佛事ト十一月十四日ニ十一月會トテ宗祖ノ創立セシ佛寺トヲ中世ヨリ合行シ十月一時ニ執行シ來リ近世マテ五年毎

二執行ス今明治十二年十月ハ即チ其式年ニ該
レリ

考證官班記下曰十一月會延暦二十年十一月十
四日傳教大師於止観院始修之至二十三日十箇
日第五日堅義堅者義真證義三人圓寂（大安寺法相）靈
雲（藥師寺法相）慈光（東大寺法相）大同四年博士義真圓修此
後專寺相続嘉元元年被准御齋會之由宣下勅使
左中辨惟輔也六月會弘仁十四年始之其儀如十
一月會承和十三年加堅義以上出於立者者南
北二京隨時勤之至探題者必南京ノ輩勤之慈恵
大師治山之時被宣下探題之後為自門人康保四
年五月九日禪藝已講探題宣下精義自是以前雖
有他人無宣下精義建暦三年十一月七日六月會

被准御齋會之由宣下勅使權右中辨紀高
座主記或問云法華會ノ事天正十二年ニ大會再
興スヘキヨシ探題中ヘ　綸旨ヲ下サル仍テ同
十七年九月十一日ヨリ廿日迄両會ヲ修行スト
云々
座主記第十八ノ座主権律師良源ノ下ニ康保三
年十二月廿六日六月會可加廣学竪義之由宣下
安和元年戊辰六月會廣学竪義
同二十八大僧都教圓ノ下ニ曰ク寛徳元年自今
年霜月會百行竪義之由宣下
一教王護國寺御修法
右ハ大内裡ノ時唐ノ内道場ニ擬シテ宮城ノ内
ニ真言院ヲ建ラレ正月八日ヨリ七ヶ日ノ間此

院ニ於テ護持國家ノ法事アリ此レヲ後七日ノ
御修法ト云フ則チ承和元年弘法大師ノ奏請ニ
始ル真言院廢絶ノ後ハ南殿ニ於テ行ハレ來リ
明治三年後ハ東寺真言院代灌頂院ニテ行ヒ來
レル由尤將来宮中ニ於テ行ハルヽノ旧儀ヲ復
スヘキニアラズ該寺ニ於テ執行セシメ勅使ヲ
臨監セシメラルヘキナリ（五年一度位ニテ可ナ
ラン）

考證延喜式曰凡真言法每年正月八日至十四
日一七箇日於真言院修之
公事根源曰今日ヨリ七日ヲユナハル今年金剛
界十レハ明年ハ胎藏界年々ニ替ルヽ々修セラ
ル後七日ノ御修法トハ此事ナリ天長六年ニ弘
法大師大唐ノ内道場ニ准レテ真言院ヲ宮中ニ
申立ラレテ承和元年ヨリ大師則此法ヲハレメ
行ハル
初例抄承和元年正月後七日御修法始於真言院
被修之承和元年始修御齋會御[illegible]有勅止勘解
由使之廳号内道場真言院於此所始修御修法具
在別
初例抄觀應二年後七日御修法事依天下騷乱延
引停止并在所等勅問諸家九條右大臣勅答云後
七日法延引停止同事於延引粗雖有其例停止之
条可為何樣哉次其所事於里内勤修未勘得例真
言院誠可有怖畏者東寺若可宜欤両条須在時議
乎仁和寺御堂御注進云後七日法於他所被行長

元九年依真言院修造於豊樂院被行之應德二年
同三依真言院顛倒於大膳職被行也

一園城寺灌頂會

本寺ハ字多天皇ノ御宇智證大師ノ興起ニシテ
延暦寺東寺等ヨリハ後レタレト一條天皇ノ頃
ヨリ稍盛ニナリ終ニ延暦寺ト拮抗スルニ至レ
リ然ルニヨリテ此灌頂會ハ上文ニ擧々ルモノ
ヽ如ク國史格式等ニ所見無シト雖モ古來貴重
セシ法會ナルコト疑ヒナシ
同寺灌頂會ノコトハ歴世綸旨并ニ勅宣等アル
ヨシ近キハ二年目遠キハ十年二十年目ニ時々
奏聞ヲ經テ之ヲ勤行スルノ例ナリ而シテ近ク
ハ安政戊午ノ年時ノ圓滿院宮ノ導師ヲ以テ勤
行セラレシ以來廢絶セリトゾ（聖護院宮ニテ行
ハレシ近例アレ𪜈是ハ當時長吏ノ宮ノ威權ヲ
以テ行ハレタルナレバ引証スルニ足ラスト考
フ）（六年一度位ニテ可ナラン）

一法相宗最勝會

右ハ古ヘ御齋會ト稱シ毎年正月八日ヨリ十四
日迄大極殿ニ於テ行ハル金光明最勝王經ヲ講
シテ國家ノ平安ヲ祈念ス故ニ平常諸寺ニテ行
フハ最勝王經ヲ講シテ國家ノ平安ヲ祈念ス故
ニ平常諸寺ニテ行フハ最勝會ト云ヘリ宮中ニ
テ行ハル、ハ天武天皇ノ九年ニ始リ毎年ノ事
トナレルハ桓武天皇ノ延暦二十一年ヨリト云
ヘリ其廢絶ノ年ハ詳ナラス思フニ應仁ノ乱以

後ナルヘシ

考證 江家次第曰御齋會日本紀云　天武天皇九年始說金光明經于宮中

釋家官班記云稱德天皇神護景雲二年於宮中修之每年正月八日始行但延否不定也

續日本後紀云仁明天皇兼和七年正月乙酉始於大極殿修最勝會

一 仁王會

右ハ古來每年二月(或ハ三月)八日ヨリ大極殿紫震殿清涼殿ナトニテ此佛事アリ仁王護國般若經ヲ講セシム齋明天皇ノ時ヨリ始マル又主上御一代一度ノ大仁王會トテ殊ニ嚴儀ニ行ハルヽ事モアリ廢絶ノ時代不詳

考證 釋家初例抄云一代一度仁王會天平元年六月始之

江家次第曰一代一度仁王會大臣奉勅令勘日時并定僧名定行事九人裝束堂六人裝束僧六人行事辨令成出居日時申之上卿定ヲ一就行事所天曆以後上卿不必就之近例并以下着成請奏奏下之先是定寄史生官掌又寄外記史生上卿經奏門令文章博士作呪願如恒奏問之給官符於諸國大臣並行事上卿相共定奏京中卅一堂僧名令案近例大臣先例勘日時之次使定之

中殿　南殿　大極殿　豐樂殿

武德殿　朱雀門　羅城門　西院

四后　春宮　太政官　外記廳

中務省　式部省　民部省　兵部省
大蔵省　宮内省　左京職　右京職
左近府　右近府　左衛門府　右衛門府
左兵衛府　右兵衛府　東寺　西寺
聖神寺
南殿中殿諸院諸宮各七僧自餘皆三僧仰諸國六
十六座也若京中卅四座可被定欲可満於百座之
故也云々
寺門傳記曰毎年春二月秋七月光[illegible]吉辰行之於
宮中諸殿及宮外寺社敷百高座講説仁王般若経
百座
右ハ延暦寺法華會御許可相成候得ハ其權衡ヨリ他
ノ四會ヲモ追テ請求スル者アル時ハ御聽許内ノ者
ト相考候然ルニ最勝會仁王會ノ如キハ當今既ニ其
主タルヘキ佛寺モ無之ニ付差向キ請求スルニハ不
至ト相考候此他維摩會大乘會大元帥會御八講季御
讀經等ノ旧典アリト雖モ此等ハ御信仰ヨリ特旨ヲ
以テ行ハルヘキ者ニシテ豫メ内規ヲ記列スヘキ
ノ限ニアラス
右佛會ニ関シ臨監ノ為メ派遣セラルヘキ勅使ハ定
規式部官員ニ拘ハラス其時々ノ御詮議ヲ以テ人体
御定相成度猶其儀式次第等ハ追々勘査可及上申候
○全國勧進ヲ許可スヘキ社寺ノ際限
一准官幣社改造ノ為メ
一各宗総本山改造ノ為メ
一千年以前創立ノ社寺保存方法施行ノ為メ

右勧進ノ等級ヲ左ノ三等ニ區分セサルヲ得ス

一第一等勸進

若干ノ金負ヲ御寄納相成且有志寄附可致ノ旨ヲ布達セラルヘキ者但シ方今右布達ヲ以テ之ヲ行フヘキニアラサルヲ以テ其社寺ヲシテ勸進文ヲ調製セシメテ内務省ニ於テ之ヲ檢査シ之ニ認許ノ旨ヲ記入スヘキナリ

參照 明治元年四月廿一日神祇局ヘ御沙汰

太政更始ノ折柄表忠ノ盛典被為行天下ノ忠臣孝子ヲ勸奬被遊候ニ付テハ楠贈正三位中將正成精忠節義其功烈萬世ニ輝キ真ニ千歳ノ一人臣子ノ亀鑑ニ候故今般神号ヲ追謚シ社壇造營被遊度思召ニ候依之金千圓御寄附被為在候事

但正行以下一族ノ者等鞠躬盡力其功勞不少段追賞被遊合祀可有之旨被仰出候事

○右同日兵庫裁判所ニ御沙汰

別紙之通楠社造營被仰出候ニ付テハ天下有志ノ者御手傳致度儀申出候ヘハ御許ニ相成候間於其地程能可取計様被仰出候事

○同年六月十九日布告

先般楠社御建立ニ付御手傳致度者ハ御差許可有之段被仰出置候処追々願出候者モ有之哉ニ相聞候ニ付テハ於遠國筋違ノ取集方等有之候テハ不相済候間神祇官并兵庫縣ノ両所ヘ申出御手傳ノ品柄目録相納置追テ右両所印鑑有之書付ヲ証トシ差出申旨御沙汰候事

但先達而被仰出候通其最寄ノ府藩縣ヘ差出
其ヨリシテ神祇官并兵庫縣ヘ取次候儀モ不
苦事

〇明治三年六月十七日布告

一昨辰年春被仰出候楠中將社御造營ノ儀今度
兵庫縣ヘ御委任ニ付宮百官華族以下士族卒庶
人ニ至ル迄有志ノ者金穀或ハ材木等寄附ノ儀
兼テ御沙汰ノ通被差許候間同縣ヘ可相納候負
數書ハ當七月中両京ノ内神祇官ヘ可差出候事

一第二等勸進
御寄納ナク勸進文ヘ認許ノ旨ヲ記入スル第一
等勸進同樣ノ者

一第三等勸進
御寄納ノ有無ニ關セス勸進文ヲ撿査スルニ及
ハサル者

右ニ付從前公布ノ誤解ヲ説明シ置カサルヲ得
ス元來政府ノ意旨信徒喜捨ノ淨財ヲ勸募スル
者ヲ禁止シタルコトナシ但
明治七年一月教部省番外神道諸宗管長ヘ達書
近來神社遥拜所造營并ニ教會講社ノ許可ヲ名
トシ猥ニ配札或ハ勸財等ノ所業ニ及候者往々
有之哉ニ相聞却テ布教ノ大旨ニ戻リ政治ノ障
害不少以ノ外ノ事ニ付今後決テ心得違ノ者無
之樣各會社中ニ於テ嚴重取締可為致此旨相達
候事
但此後右體ノ者北方立廻候節ハ嚴重取糺顛

末具状候様各地ノ官ヘ相達候条此旨可相心得事

右ニ因リ或ハ有志信徒壇徒ノ寄附金ヲモ差止メ候ノ府縣ナキニアラス然レトモ元來禁止シタルニ非サレハ今更ニ其解禁ノ達ヲ為スモ亦不都合ナリ近頃天龍寺住職ヨリ同寺再建ノ事ニ付伺并ニ其指令左ノ通

先皇ノ勅願ニテ御建立相成候寺院時勢ノ變動ニ際シ國家ノ為メニ兵燹ニ罹リ宇全ク烏有ニ帰シ住職ノ任トシテ坐視傍観スルニ不忍再造ヲ謀ラント要スレトモ自力ニ不能因テ廣ク有志ノ淨財ヲ勸進シ候トモ明治七年一月廿日教部省番外達書ノ御趣意ニ抵觸不致候哉否

至急何分ノ御指令被成下度候也

明治十二年四月九日

右ニ付指令

書面伺之趣ハ七年教部省番外達書ニ関係無之依テ寺院再造ニ付有志ノ者ノ寄附金勸進ノ儀ハ不苦筋ト可心得事　同年四月十二日

右ノ如クナルカ故ニ随意ニ勸進簿ヲ作リ有志ノ寄附ヲ募集スルハ政府ノ問ハサル所明瞭ナリ然ルニ今日其勸進文ニ政府認許ノ旨ヲ記入スルトセサルニ於テ大ニ効力ノ殊異アルヲ以テ其記入ナキ者ヲ以テ假リニ第三等トス

右三等ノ分ハ総テ全國ニ関スル者ヲ云フニシテ猶一府縣限リ或ハ一郡區限リノ勸進方法ヲモ要スル

ヲ以テ其場合ニ於テ知事令若クハ郡區長ニ於テ其
勸進文ヲ認許スルノ手続ハ猶追々勘査上申可及候
前ニ記シタル三項ノ者ヲ右ノ三等ニ比擬シテ之
ヲ區分スルハ其社寺ノ實況由緒ノ厚薄ニ関シテ
議定スヘキ者ニシテ今其社寺ノ名ヲ記載シテ之
ヲ預定スルハ頗ル困難事件タリ但大隈朝臣建言
ノ延暦寺ノ如キハ御由緒家モ厚ク千年以前ノ寺
院ニシテ一宗ノ総本山ナレバ第一等勸進ヲ許可
セラルヽハ固ヨリ論ヲ俟タサル儀ナリト存候
滋賀院ヘ永世給禄賜與ノ可否
明治九年五月廿五日宮内卿ノ上請ニヨリ同月廿七
日ノ指令ヲ以テ從前寺禄五百石以上千石迄ノ分ハ
貳百五拾石三百石以上五百石迄ノ分ハ貳百石百五
拾石以上三百石迄ノ分ハ百五拾石其以下ハ從前ノ
高ニ據置右　代金年々宮内省ヨリ下賜ハル旨ヲ定
メ從前ノ寺禄ヲ廢セラレタリ

仁和寺　大覺寺　妙法院　聖護院　青蓮院
勸修寺　三千院　曼殊院　實相院　三寶院
隨心院　毘沙門堂　靈鑑寺　大聖寺　光照院
寶鏡寺　曇華院　林丘寺　瑞龍寺　三時知恩寺
総持院　寶慈院　本光院
以上京都府

圓照寺　法華寺　中宮寺
以上堺縣

圓滿院　禪智院
以上滋賀縣

合計二十八ヶ寺院

右之外年金賜與ノ寺院左ノ通

泉涌寺　年金百四ッ、外ニ御靈堂修繕料付之

法常寺　年金百四ッ、

靈源寺　同上

水藥師　年金百五拾四ッ、

長福寺　年金八拾四ッ、

圓通寺　年金百四ッ、

一又一時限賜金ノ沙汰アリシ者左ノ通

般舟院　明治九年十一月一時賜金貳千四

以上賜金合計ノ為メ金貳万六千四年々宮内省

ヘ御交付相成來レリ但シ般舟院一時賜金ハ除

之

特別ノ御由緒アル寺院ハ右ニ記列シタル如ク既ニ夫

々年金賜與ノ例格アリ今滋賀院ノ如キハ御由緒最モ

深キ者ニ付必右諸寺院同様ノ御處分相成可然將来右

ヲ例格トシテ續々願出ヘキ程ノ者ハ無之ト相考候但

一箇輪王寺ナル者他日或ハ右ニ比擬シテ可願出哉ノ

懸念ナキニアラズト雖モ右ハ維新ノ際妄々ノ次第モ

有之儀ニ付容易ニ右諸寺院ノ例ニ準スヘキニアラス

其他古寺勝區ノ如キハ他ノ方法ヲ以テ之ヲ保存スル

モ決シテ永世年金給与ノ御沙汰ニ及ハサルモノト考

定メ候

右ニ記シタル二十八ヶ寺院以下并ニ滋賀院御由緒ノ

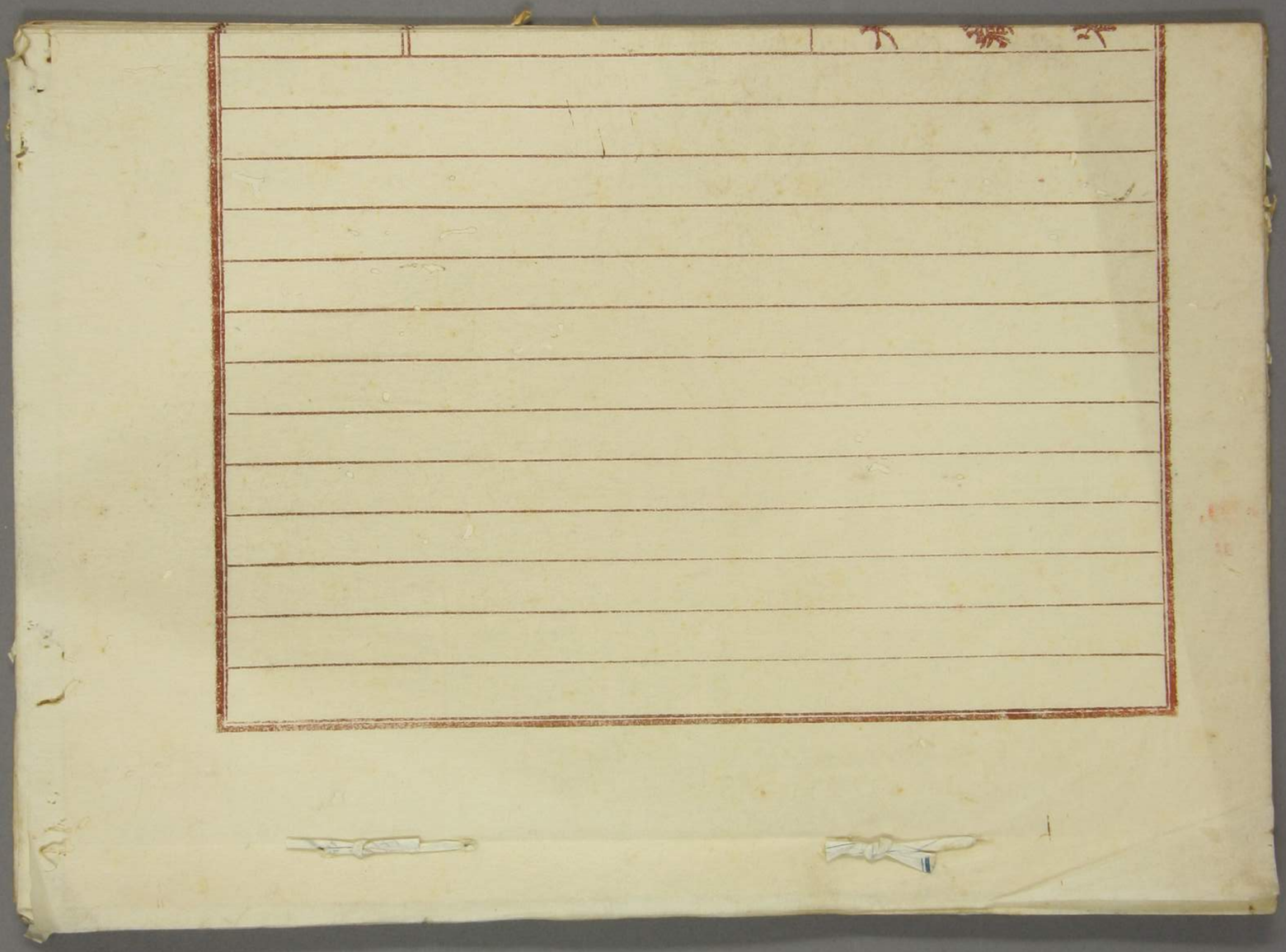
詳細ハ頗ル冗長ニ渉ルヲ以テ茲ニ畧之候

別紙社寺保存方法書ヲ上ラントスルニ當リ更ニ大隈朝

臣建言書ヲ拜觀シ書中三項意旨ニ就キ之ヲ賛成シ其

考證等ヲ勘査スル所如右謹ン明裁ヲ仰キ候也

明治十二年六月十　日

内務権大書記官兼太政官少書記官櫻井能監

右府公閣下